四時山痕集

奈良為至輯

上篇

柳田文庫
文庫11
A1741

龜卷

帝室博物館

文庫11
A1741

春秋穀梁傳

四

春秋穀梁傳

卷十二

乙

鍾山

鍾山文庫

嗚呼云備具血性生旌
旨慘其生而壯其死者會
歟尚陰死無益亦惜況
於人彰彰然其法家
自業於死生之習

左豈有他一洞安心者
也而人曰與生死
理會死為皇由
危殆難事果有安心
者乎何貴乎死生歸

乘氣乘化而
左宜身反省於味四壁
冥然默然的時候回
想昔日心靈源潛之
初筆懷然稍久

富為之序

明治十三年初春

於海内外

鍾山後

柳田泉文庫

血痕集序

思之思之鬼神通、況慷慨悲憤次之以一死、何事不成矣、蓋死者人之所難、生者人之所愛也、非狂癲白痴、誰濫忘其生乎、然殺身而不顧者、有性命以不足換義者也、自古、視志士仁人殉國者、皆莫不出于殺身之舉也、因之觀之、非死不至誠、非至誠

難致死矣、今友人鍾山子、編今世呼以為叛人者傳、名曰血痕集、蓋有寓意而著乎、吾聞讀孔明出師表不泣者非忠臣也、世人讀此集、泣乎、怒乎、將笑乎、余閲此集、尚覺血痕迸筆端、

明治十二年立秋前一日

常陽　破岳鳥居狂夫序

明治血痕集　卷之上

明治血痕集附言

一編中所載之諸士。概皆余昔日。所師事兄敬友愛。今當輯其行為。思曾共約雄行之日。喟然歎獨在人間。當寫其議論。思親聽快說之時。悲不施其實地。而事逝。至叙其臨終之辞。或歔欷流涕。或切齒扼腕。絶而又蘇。蘇而又絶。投筆者屢焉。而近歲國家多事。未遑暖座。奔走四方。然手未曾解此稿。旅館時探行李。欲加添削。半天星辰。如重圍中望敵營篝火。

窓端風籟如暗夜聽兩軍突喊或蓬窓閲稿風濤怒號疑轟々壞山河之巨砲瀛灌吹笛疑傳進退於嶺外之喇叭隨見隨聞非不起悲壯之情遂使余不忍推敲章句之不整行文之拙劣固其處況於余非文墨之徒哉今公之世猶買笑江湖然是猶可恕也獨恐倒瀾之世潮弄區々文墨之迂具來故人泉下之非議也然有今人見之以振後世見之以起者豈為無補世道人心哉是余有此編之

意也

一編中諸什多發刀下鉄窓憤嘆慷慨之際悲壯之餘音歴々溢紙上真熱血之餘瀝余又灑血涙於墨池凝血誠於筆端以書然即此編又余熱血之餘瀝也名曰血痕集又不宜哉

一明治年間建反旗於政府一躓為不祭之鬼者不遑枚舉而今僅輯其數人者極要精確也而其人生来事業僅記其百分盖見聞狹

隘也。其人之偉事奇行。及詩歌文翰。必有脱漏。看者。欲使後世編史家作正史請速報之。他日必改刻爲。

一當時走利之徒。喋々傳諸士之傳記。猥雜鹵莽。殆無可信。至甚獻媚於政府。誤後世者。比々皆是也。余曾憾傑業功烈。埋没於地中。國事餘暇。枉取秃筆。著其名。蓋聊報故人。而以贈碌々之罪爾云。

一編中所載之詩歌。格律声音。或有誤模標者。

而所以載之者。或就其真筆。或記存余之胸臆者也。不敢僭越加丹黄。失敬禮。而當時膾炙人口。詩歌刪之。蓋省繁冗也。

明治十三年冬十二月

鎮西狂風　奈鍾山至誌

明治血痕集上篇

目次

西郷　隆盛　薩州人
前原　一誠　長州人
佐世　一清　長州人
加屋　霽堅　肥後人
武部小四郎　筑前人
川越庸太郎　筑前人
宮嵜　八郎　肥後人
高津　運記　肥後人

長岡　久茂　會津人
竹村　秀俊　會津人
井口慎次郎　會津人
中原　成業　會津人
舌間　慎吾　筑前人
今村百八郎　筑前人

英雄獨知英雄

明治血痕集　上篇

筑前福岡　奈良原　至　編述

○

西郷　隆盛　薩摩鹿児島之人也、初メ吉之助隆長ト稱シ、後隆盛ト改ム、南洲ト号ス、少壯、屢々水城ニ遊フ、藤田東湖夙ニ其大器ヲ愛ス、後尊攘ノ大義徹セサルヲ憤リ、京僧月照ト、薩海ニ投ス、月照長遊矣、西郷復歸矣、戊辰ノ役、功績諸將ニ冠絶ス、朝廷之ヲ賞シ、禄三千石ヲ賜ヒ正三位ニ叙シ、參議ニ任ス、明治六年、陸軍大將

嗟西郷江藤已逝矣今日何人在世

蹂躪亜州在此機惜哉

ヲ奠ス、同冬、征韓ノ議起ル、西郷、江藤新平、副島種臣、板垣退助、後藤象二郎等ノ、諸参議ト、最モ之ヲ主唱シ、廟議稍ヤ決ス、西郷自ラ全權大使ト為リ、先ツ往テ、其罪ヲ數ヘ彼レ頑然、遷ラサレハ、之ニ次ニ、兵ヲ以テセンヿヲ乞フ、乃チ内決ス、西郷ノ抃喜、顔色ニ見ハレ、恰モ児女ノ離母ニ逢フカ如シト云フ、後廟算一變、不可征ニ決ス、同十月二十三日、西郷表ヲ奉リ、闕ヲ辞シ、郷里ニ帰ル、海陸軍人、其他、之ヲ聞キ、職ヲ退テ、帰縣スル者、絡繹、項背、相望ム、人心之カ

陰德陽報不可誣

為メ、大ニ動揺ス、其麑児島ニ帰ルヤ、自費ヲ以テ、私学校ヲ設ケ、士氣ヲ訓練鼓励ス、常ニ山猟ヲ好ミ、獨リ渓谷ヲ跋渉シ、自カラ樂ム焉、好テ貧窶ノ家ヲ過キ、茶ヲ乞フテ憩ヒ、紙幣若干ヲ、窃ニ莨盆或ハ茶器ノ下ニ置キテ去ル、當時、人何人ノ所為ナルヲ知ラス、後西郷ナルヲ知リ、皆為ニ感泣シテ、其用ヲナサンヿヲ、思フト云フ、予、麑児島ニ遊フ、歳余、一日交友數輩ト、梅ヲ城北里許ノ所ニ探ル、一荒径アリ、水ヲ泝テ、山間ニ通ス、之ヲ行ク數十歩、一友、遽ニ吃驚、道ヲ他ニ取ラントス、予訝リ其故ヲ問フ、曰ク、先生来ルト、予益々訝ル、友人、一田翁、襤褸百結、背ニ負ヒ、足、泥鞋ヲ穿チ、腰、行厨ヲ結ヒ、手、竹獵網ヲ

烏合敵天下其素可思哉

杖ヲ携ヘ、猟犬ニ三ヲ伴フ者ヲ指ス、漸ク相近キ、余初メテ、其西郷ナルヿヲ信シ、不覚道ヲ譲テ礼ス、西郷又黙答シテ過ク、恩愛ノ情、冥々ノ中ニ存シ、威厳ノ光、襤褸ノ隙ニ発ス、嗚呼十万ノ壮士、一呼ノ下ニ、生死スル所以ノ者、又素アル哉、麑人、西郷ヲ呼テ、大先生ト云ヒ、桐野ヲ呼テ、先生ト云フ、後学徒ヲ駆テ、吉野原城東地ヲ開墾ス、

草矢木泣況人哉

同十年二月、兵ヲ起シ、肥後ニ出ス、戰利アラス、退テ日薩隅ニ轉戰シ、最後、死士絶ニ、五百餘人ヲ率ヒ、可愛嶽ノ重圍ヲ破リ、鹿児島ニ帰リ、城山ニ據ル、同九月二十四日排暁、官軍大挙、来リ擊ツ、衆寡、敵セス、遂ニ死焉、時ニ年五十三、葬屍同所浄光明寺、西郷ノ履歴、世往々之ヲ傳フ、故ニ畧スト云、

○

學文無主等痴人認得天心志氣振百派紛紜乱如線千秋不動一声仁

櫻井駅

幽香猶逗旧南山千載芳名在此間花謝花開櫻井駅慇懃遺訓涙盈顔

○

閨（ねや）

戸ヨ獨や人の待ぬらん

立別き行く横雲のそら

再度水戸ニ遊ヒ東湖先生ヲ思ヒ出テ

今も猶思ひ出つらぬ筑波山
身よしむ風よ吹かれしものを

西田村私学校記

善士能為善士書

蓋学校者所以育善士也。不只一郷一國之善士必欲為天下之善士矣。夫戊辰之役。蹈正義血戰奮鬪而斃者。乃天下之善士也。故慕其義。感其忠。祭之於茲。以鼓舞於一郷之子弟。亦所以盡学校之職也。西郷隆盛謹誌。

胸中懸日月

城山洞窟中作

慷慨多年過此身。滿胸勇氣為誰振。吶喊声裡蹈三岳。復成洞雲深處人。

洒々磊落

夜深秋意動。比隣寂無声。幽間獨調琴。松風相和清。

偶題

挺出一身當萬難。丈夫誓不死安閑。掃除國賊塵夷賊。白日青天刮目看。

題知らぬ故郷の谷間を出て一時鵠都の空を月ぞ夜よせん

同

結ほれし心の氷解けやらて

春ならぬ春よ春来まけて

偶題

男児誓欲拂二蕪人一浴レ雨ニ櫛レ風ニ幾苦辛。請見千秋論定、後。今時國賊却テ忠臣。

○

前原一誠　長州萩人、本性、佐世、後藩主毛利氏、姓ヲ前原ト賜フ、因テ改ム、父ヲ八十八ト云フ、又忼慨ノ士ナリ、明治九年、前原ノ事、破ルヽヤ、自カラ腹ヲ屠テ死ス、初メ吉田松陰ト友タリ、安政五戊午、冬十二月、松陰、幕譴ニ觸レ、獄ニ下

此父此子

ルヤ、書ヲ寄セ、永訣ヲ期ス、其書ニ曰、生死離合人事倏忽、但不奪者、志、不滅者、業、天地間可特者、獨是而已、吾不見公而投獄、々不可脱、公不得見吾而志業之寓于天地、吾與公當務焉、再陸務觀有言、死生原是開闔、眼禍福正如反覆、手嗚呼大丈夫之所重在彼不在此也、以テ平生ノ交義ヲ見ルニ足ル、前原、稟資至孝ニシテ寡黙、々宇ト号ス、蓋シ今上帝ノ賜フ所ロ也ト云フ、又自カラ、参差生ト称ス、初メ松陰ノ家校ヲ、松下村ニ設クルヤ、前原其ノ門ニ遊ヒ、高杉東行等

ト、友トシ善シ、後藩廳ニ入テ、政務ニ與リ、長防四境ノ役、内政宜シキヲ得シハ、其力、大ノト云フ、慶應二丙寅春、東行ト共ニ兵ニ將トシテ、小倉城ヲ陷レ、後獨駐テ、人心ヲ鎮撫ス、戊辰ノ役、北越ニ戰テ、功最モ偉也、明治維新ノ際、天子其勞ヲ賞シ、禄若干ヲ賜ヒ、從四位ニ叙シ、越後府知事ニ任セラル、治績大ニ挙リ、民之ヲ望ム、猶ホ父母ノ如シ、幾クモナク、朝ニ召サレ、參議ニ任シ、兵部太輔ヲ兼ヌ、時ニ、朝廷兵制ヲ釐革ス、而メ其持論、廟謨ト協ハス、明治二

拋人間事而在人間事

年、遂ニ職ヲ解テ、性ヲ閑地ニ養ヒ、悠優自適、復タ人間ノ事ヲ、顧ミサル者ノ如シ、同七年春、前參議江藤新平、征韓ノ議ヲ、固執シ、兵ヲ肥前ニ起シ、勢、漸ク盛大、將ニ山口縣下ニ、波及セントスルヤ、縣令中野梧一、馳テ萩ニ到リ、士族ノ鎮撫ヲ依托ス、前原立テ檄ヲ傳ヘ、衆ヲ明倫館ニ集メ、懇ニ之ヲ喻ス、其檄ニ云、九州地方、紛擾ノ形勢、漸ク盛大ニ及ハントス、其名義ノ在ル所、未タ確證ヲ得スト雖、或ハ私怨ヲ報スル意アリト云フ、毒烟ノ及フ所、四隣守ヲ失ヒ、縣官

職ニ安セス、其勢ヒ、必ス將ニ我縣ニ波及セントス、焼眉ノ急坐シテ之ヲ待ツヘカラス、本月八日、中野梧一、萩地ニ来リ、此ノ事ヲ、予ニ謀ル、予辞職以来、久シク閑地ニ居リ、今復タ出ツヘカラス、然ルトモ天下ノ大事、坐視スルニ忍ヒス、故ニ梧一ニ於テ、徳ナク怨ナシト雖モ、断然許シテ疑ハス、惟フニ、二州ハ毛利氏、勤王ノ故國、朝廷維新ノ基スル所、凡ソ二州ノ臣、今マ誰カ朝廷ノ臣タラサラン、昔シ誰カ毛利氏ノ臣タラサランヤ、幸ニ奸雄ノ嘯集ニ誘ハレスト雖モ、若シ不逞ノ徒ヲシテ、我祖宗ノ地ヲ蹂躙セシメハ、啻ニ　聖天子ノ、宸憂ヲ増ス再ナラス、復タ何ノ面目アッテ、先公ニ地下ニ見ヘンヤ、諸君苟モ其志ヲ同フセハ、宜シク力ヲ合セ、共ニ謀リ、彼ノ使来ラハ、是ヲ以テ之ヲ説キ、彼レ若シ聴カサレハ、堅ク四疆ヲ守リ、賊徒ヲシテ、寸歩ヲ越ヘサラシメントス、太平以来、頗ル俗吏ニ侮トラレ、殆ト士ヲ視ル、土芥ノ如シ、然レトモ今日大義ヲ辨シ、國難ニ赴ク、是レ士ノ本領ナリ、諸君夫レ疑フ勿レ、丙寅ノ役、戊辰ノ挙、

我二州ノ武、實ニ天下ニ名アリ、昔日精鋭ノ声ヲ墜シ、九州烏合衆ノ、笑トナル勿レト、時ニ明治七年二月也、衆為メニ動カス、同八年、朝廷復タ用セント欲シ、東京ニ召ス、前原乃チ横山俊彦等、數人ヲ拉シ、東上、拜官ノ日、將ニ近キニアラントス、偶テ青森縣人、永岡久茂ト、議スル所ロアリ、遽カニ歸郷ス、人其何ノ故タルヲ知ラス、大ニ疑ヲ生シ、將ニ風濤ノ怒號センヿヲ危ムノ状アリ、曾テ一夕、奥平謙輔、横山俊彦、其他數人ト、宴ヲ閑散ノ地ニ張リ、清風ニ吟シ、朗

危哉

月ニ嘯キ、詩ヲ賦シ、歌ヲ詠シ、互ニ相歡娛シ、平生ノ鬱ヲ酒杯ニ訴ヘ、一時ノ快ヲ肴榼ニ取リ、各天上ニ遊ヒ、仙境ニ入ルノ思ヲナス、時ニ前原、突然病ヲ發シ、顔、菜色ヲ呈シ、頻リニ吐血シ、煩悶頃由、人事ヲ辨セス、一坐大ニ驚キ、周章狼狽、為ス所ヲ知ラス、暫焉アッテ、蘇息スト雖モ、從是毎ニ病床ニ卧シ、又藥劑ヲ離サスト云フ、同九年七月、青森縣人竹村秀俊、永岡久茂ノ囑托ヲ兼ケ、萩ニ到リ、面ノアタリ前原ト、議スル所ロアラントス、然レモ、猶ホ病褥ニ在テ、頗ル

談論ヲ厭フ、故ニ弟佐世一清、及ヒ横山俊彦ヲ、竹村秀俊ノ逆旅ニ遣シ、東西挙兵ノ緩急、及ヒ他ノ動静ヲ通セシカ為メ、暗符ヲ作リ、共ニ之ヲ分タシム、同十月二十三日、熊本敬神黨ナル、緒方某、来リ告テ曰、我党今将サニ大事ヲ起サントス、請フ之ヲ賛ケヨト、前原陽ニ之ヲ諾スト雖モ、陰ニ之ヲ疑フ、然レ𪜈曾テ竹村秀俊ニ約シタルヲ以テ、暗号「ワタ子アケ」、二十五六日頃、開店（熊本挙兵ヲ云フ）ト、齋藤某ト偽名シ、在東京ナル、永岡久茂ニ電道ス、初メ該党ノ須袖タル、冨

孔明不能動曹子桓能動焉

永守國、阿部景器、前原ヲ過キ、九年梅雨ノ頃ヲ期シ、共ニ兵ヲ起シ、馬首ヲ東セントヲ約シテ去ル、然レ𪜈、二人ノ熊本ニ帰ル、党中ノ議論、戦否ノ間ニ沸騰シ、事為ニ中止ス、前原之ヲ聞キ、大ニ其言ヲ食ムヲ憤リ、孔明ノ故智ニ擬シ、婦女ノ服ヲ送テ、之ヲ辱ム、該党激憤、事遂ニ此ニ至ルモ、前原猶ホ之ヲ疑フト云フ、同月二十六日、曾テ豊前小倉ニ在テ、九州地方ノ動静ヲ窺ヒシ、玉木正誼、馳セ帰リ、同月二十四日、熊本變動ノ事ヲ告ケ、且小倉及ヒ筑前、秋月モ、相應シ、

九州一般人心匈々タルノ状ヲ報スルニ及ヒ、始メテ緒方某ノ言ヲ信シ、謂ヘラク、此ノ機ニ投シ、急ニ兵ヲ擧ケ、山陽、山陰ノ兩路ヲ席巻シ、勢ニ乘シ、大坂城ヲ陷レ、此ニ根據ヲ鞏フシ、心静ニ大事ヲ謀ラント、乃チ、奥平謙輔、横山俊彦、小倉信一、有福實信、及ヒ弟、山田頴太郎、佐世一清、以上刑死奥平左織、山崎某、山縣某、小笠原某、渡邊某、三偶某、栗屋某、玉木某、松岡某、馬来某、長屋某、児玉某等ヲ招キ、従容告テ曰、維新以来、已ニ九年ノ久ヲ経ルモ、聖天子ハ恩沢毫モ萬民ニ

今日泉下瞑目不耐冷汗

及ハス、人心下ニ離レ、且巧利ハ説、道路ニ充チ、廉耻ハ俗、地中ニ埋ル、内國已ニ此ノ如シ、豈外夷ハ猖獗侮蔑ヲ防クニ遑アラン、神州ハ危殆今日ニ逼リ、臣民ハ義、又今日ニ極マレリ、聞ク本月二十四日、肥後人、兵ヲ熊本ニ挙ケ、一戰鎮兵ヲ鏖殺シ、其器械ヲ奪ヒ、風馳シテ東シ、縣ニ守城ナク、野ニ交兵ナシ、小倉以南、糧ヲ裹ミ以テ待ツト、予不敏ナリト雖モ、聖天子、其嘗テ微勞アルヲ記シ、予ヲ卒伍ノ中ニ拔キ、參政ノ末ニ置ク、議論、敢テ不合、冠ヲ挑ケ、時機ヲ窺フ

誰持不可

モノ、茲ニ八年也、今日天、予ニ機ヲ與フ、故ニ大義ヲ天下ニ唱ヘ、聖知ハ萬一ニ報シ、敵愾ハ誠ヲ表セントト欲ス。不可ナルナカランヤ。衆奮テ之ヲ可決ス、因テ奥平謙輔ニ命シ、書ヲ作リ、小倉信一ニ齎シ、徳山ノ同志、飯田某、阪田某、小野某ニ送ル、其略ニ曰、昔日、我忠正公、悼ニ朝廷失職憤ニ徳川違命坐薪嘗膽枕戈以待旦ヲ、而士太夫、亦感其誠心啜血相揞斷死不顧、遂能安二海内ヲ以致諸ヲ聖天子中畧夷狄横行、海内疲弊、神州之安危、朝不謀夕、中畧始事既虫讓他縣人而、

収功猶有望諸君矣ト。此夜飛説アリ、佃基清衆ヲ明倫館ニ會シ、前原ヲ暗殺シ、或ハ其党ヲ討タンコヲ謀ルト、前原之ヲ聞キ、窃ニ奥平左織等ヲシテ、之ヲ刺サシム、事成ラスシテ止矣、同二十七日、前原等明倫館ニ集會ス、時ニ横山俊彦、萩ニ匿長タリ、則チ之ニ令シ、戸長ヲ呼喻シ、士族ノ集會ヲ促サシム、又玉木正誼、佐世一清ニ命シ、書ヲ須佐ノ同志多根某ニ寄セ、来リ會セシム、於是前原策ヲ案シ、虚声ヲ藉リ、士民ヲ鼓動センカ為ニ、西郷隆盛、予ニ送ルニ、小銃三千

挺、大砲八門及ビ彈丸焔藥ヲ以テス、其處置如何セント書シ、區長ニ奥證ヲ為サシメ、縣廳ニ請問焉、同二十八日、來リ會スル者、一百余人、乃チ山田頴太郎等ニ命シ、兵士ヲ編製セシメ、將ニ山口ヲ進擊セントス、忽チ訛傳アリ、官軍大舉來リ衝ク、則チ戰ハント欲シ、兵士ヲ整列ス、時ニ縣令関口隆吉、屬官直村某ヲ遣シ、書ヲ前原ニ送テ曰、熊本騒亂、已ニ鎮定ニ歸ス、足下宜ク、其衆ヲ散スヘシト、前原乃チ赤川某ニ命シ、陽テ其命ニ從ヒ、陰カニ衆ニ謂テ曰、彼單身、

此ニ來ル、果シテ鎮兵ノ續キ至ル勿ラン乎、然ラハ今之ヲ衝ク、固ト有害無益而已、況ヤ佃党、後ヘニ在リ、德山ノ應援成否未タ知ル可カラス、寧ロ道ヲ山陰道ニ取リ、道路通セサレハ、則チ戰ヒ、遂ニ闕下ニ、出テンニハ如カスト、乃チ公金ヲ奪ハント欲シ、自ラ筆ヲ採リ、縣令ヨリ、區長ニ送ル、偽書ヲ作リ、區長ノ添書ヲ併セ、之ヲ小笠原某ニ齎シ、扱所ニ達ス、則チ金七百圓ヲ獲、之ヲ以テ軍資ニ供ス、同二十九日、午前二時、明倫館ヲ出リ、山陰道ニ向フ、同三十日、須

奔走徒労不成可知

佐ニ達シ、益々兵士ヲ募集シ、隊伍ヲ整ヘ、名ケテ殉國軍ト云フ、此日、軍ヲ分テ海陸トシ、陸軍ヲ津和野ヨリ進メ、前原海兵ヲ率ヒ、濱田ニ至ラントス、時ニ北風樹ヲ拔キ、狂濤天ヲ摧キ、艦ヲ解クニ由ナシ、又須佐ニ歸ル、偶マ飛報萩ヨリ来リ、告テ曰、無辜ノ士民、縛セラレ、慘狀云フヘカラスト、前原大ニ憤リ、衆ニ謂テ曰、是レ佃党ノ所為タル知ル可キナリ、宜シク先ツ之ヲ攘ヒ、機ニ乘シ、山口ヲ一蹴スヘシト、還タ船ヲ僦テ、萩ニ向フ、三十一日、昧爽、越ケ濱ニ達シ、直

天無己乎

ニ隊伍ヲ列シ、奥平左織ニ命シ、斥候隊ヲ率ヒ、前進セシム、忽チ鎮兵ト戰端ヲ開ク、前原遥ニ砲声ヲ聞キ、馳テ戰地ニ至リ、百方兵氣ヲ鼓舞スト雖ヒ、如何セン、曾テ藏ムル所ノ彈藥ハ、既ニ水中ニ投棄セラレ、復タ用ヲ為サス、兵声頓ニ摧ケ、台兵ノ攻擊、益々甚シク、防クニ兵ナク、守ルニ地ナク、加レ之、山田、佐世ノ二氣、傷ヲ蒙リ、戰フ能ハス、軍勢愈々屈折シ、亦タ如何トモ為ス可カラス、時ニ奥平謙輔、馳セ来リ、嗔目切齒シテ曰、劍折レ、矢竭ク、復タ為ス可キノ期ナシ、

悲壮慨慨一讀潸然

如何之情

寧ロ縲紲ハ辱ヲ受ケンヨリ。屍ヲ青野ニ横タヘ。誠ヲ天地ニ立テント、前原曰、死ハ易シ、生ハ難シ、宜シク壮士ニ殿戰ヲ命シ、我等去テ北越ニ趣キ、将ニ大ニ後圖ヲ為スヘシ、血氣ニ任シ、死ヲ潔クスル、豈ニ大丈夫ノ所為ナランヤ、則チ途ニ上リ、十一月一日、須佐ニ至リ、奥平謙輔、横山俊彦、山田頴太郎、佐世一清、馬来奎二、従者林藏、ト倶ニ海ニ航シ、同三日、雲州宇龍浦ニ至ル、時ニ天、黒龍ヲ躍ラシ、海、白馬ヲ馳セ、狂風、石ヲ飛シ、暴雨、盆ヲ覆シ、雲霧、水ヲ掩テ、咫尺弁セ

従容就死直

ス、衆空シク、天ヲ睨ミ、洪嘆スル而已、同五日、天少シク霽ル、将ニ船ヲ出サントス、忽チ警吏、數十人来ル、衆奮テ抗セントス、前原曰、天數限リアリ命運極リアリ我豈之ヲ知ラサラン、従容縛ニ就カント、終ニ捕ヘラレ、刑ニ萩城ニ死ス、時ニ年三十九年、十ケ月也、屍ヲ城外弘法寺ニ葬ル、今ニ至テ、香花絶ヘスト云フ初メ囚トナリテ、法廷ニ至ルヤ、法官ニ謂テ曰、今ヤ囚虜ノ身ヲ以テ、哀訴スルモ、恐懼ニ堪ヘスト雖モ、自ラ巨魁ト為リテ、國憲ヲ犯セシ、大罪ハ、万死固

人之將死其言哉善諂不服膺

ヨリ甘スル所ナリ、然レ𪜈他ノ同志ニ至テハ、偏ニ寛典ヲ乞フト、又刑ニ死スルノ日、徧ク罪囚ニ謂テ曰、吾今マ逝ク矣。汝等身ヲ修メ行ヲ励シ。國恩ニ背キ。聖澤ヲ忘ルヽ勿レ。義ヲ欺テ利ヲ争フ莫レト、囚人皆仰キ見ルナク、涕淚瀟々、双袂ヲ絞リ、更ニ一語ナク、滿場聞トシテ、人ナキカ如シト云フ、嗚呼是レ如何ナル日ソ則チ明治之第九年十二月三日也

○

倉城春望

先天下之憂

國破喬木在。燹餘春艸深。無主花空發。兵驕火不侵。野禽。滿目春色寂。憂時獨傷心。

逸題

又生祖逖

此間忘却一身憂。狂直自知人所讎。江畔未逢漁夫問。半江暮雨吊孤舟。

日月豈有私

三尺壯刀凜莫干。亀文灼爍電光寒。半霄如遇荒雞叫。起向中原試錯蟠。

明治九年獄中雜吟

四十年来重五倫。精忠却為不忠臣。月明猶是有私否。不照檻倉幽裡人。

至情感天地

綱常拂地山河笑。六十余州無一男。一夜寒風鮮血
羶。神州何處露根蘭。
思尺老親不可省。半夜吹声泣老親。日月恵然無私
照。猶照楚囚檻裡人。

一讀愧死

報國丹心天地知。人間苦節獨清夷。如今世界生無
益。可法椒山是我師。

不死方事不成

九年海内事擾々。恰似將門未路年。磨礪平生報國
志。今朝一死知遷延。
勤王憂國幾星霜。回復業成今殆亡。欲獻野芹終蹉
跌。七生敵愾苦辛長。

母様よ奉る

海山の恵も露も忘れねと
報ひまつらんすべとてもなし

揚大人よ奉る

鹿を指て馬と云ふてふ世の中を
逢ひ我身の幸なりけり

渡邊妙様よ奉る

我妻も同じ姿よりあり果ぬ
世よ憂き事ぞ絶へなうまれむ
情ある人よ思ひの増ぼ鏡

夜なく移る獄や洩る月

○

一筋は誠を種と咲花の
開きもあえず散り果ぬる
國の為尽す心もうたゝかの
泡と消ぬる身とは成りぬ
たらちめを思ふ心や弥増る
獄やれ中は夜かくの夢
かくぞうは峯に嵐の烈しくて
木の葉と共に散る我身哉

重富喜太郎

討れたる我を哀れと見む人も
御國の為は尽せ真心
たらちめの母れ心や如何ならん
子は増す母の心尽しも
呼出の声松虫や秋の末

○

忠謀破れて賊となる恨を含んで九泉に帰る實
に必生の遺憾なり豊太の生死未知可憐也僕等
兄弟三人實に心忠に形賊也只千載の公論
を待耳且僕等尚未死千辛万苦野に臥山に伏北

外醜内麗有志之所尊古今一轍

海の波ま漂ひ。後圖を圖らんとす。事不遂〳〵死せも天命也。老兄幸ま。我等心中。御賢察可賜候也。

頓首。

十一月二日　一誠

重冨與三様

通真

かく深き尽す赤心届うぬも
猶浅ま至〳〵為いりおる居ん

辞世

嗟我為国死々不負君恩人事有通塞乾坤吊我魂

○

壮膽如地球

外着弊袍内畜錦衣

佐世一清　長門萩人前原一誠ノ第二弟也、性磊落不羈、細謹ニ拘ハラス、毎ニ襤褸ヲ穿ツ、人見テ以テ狂トス、其國事ヲ談スル、氣魄激烈、議論壮快、之ニ次ニ涕淚ヲ以テス、四筵為メニ感動ス、毎ニ豊前豊津ニ往来シ、深ク談士人ト相結托ス、一日、豊津ニ在リ、官其異圖アルヲ察シ、之ヲ縛セントス、飄忽一小舸ヲ、防洋ニ浮ヘ、遁レ去リ人ヲシテ其行ク處ヲ知ラサシム、時ニ風濤大ニ怒リ、海霧暗黒、捕吏遂ニ追蹤スル能ハス、遂ニ長州ニ帰ル、明治九年、前原ニ隨

壮快々

見死如帰

テ兵ヲ起ス、利アラス、銃傷ヲ蒙ル、後前原等ト脱シ、雲州宇龍浦ニ至リ、縛セラル、初メ警吏ノ来ル、一清、蹶起激憤、力ヲ提ケ、躍テ舷頭ニ上リ、之ト戦ハント欲ス、前原、其血氣ヲ戒ム、故ニ止ム矣、同十二月三日、兄前原一誠、山田頴太郎、及ヒ奥平謙輔、横山俊彦、小倉信一、有福實信ト共ニ刑死ス、其刑場ニ臨ムヤ、吏其眼睛ヲ掩フ、一清、大ニ笑ヒ、戯レニ前原ヲ呼テ曰、阿兄ヨ、弟年既ニ長ス、迷藏ハ戯ヲ廃スル、茲ニ數年也、今マ人アリ、幸ニ目ヲ掩フ、偶マ昔日ヲ回想セリ、一曲ヲ試ミント欲ス、不可ナカラン乎、前原笑テ不答、然レトモ心窃ニ、心田余地アルヲ憐ト云フ、

時ニ年、二十四年十ヶ月ナリ、前原ト弘法寺中ニ併セ葬ル、

囚ヒとられとなり萩へ護送せらるゝ途中にて

縦令へ身も何れの野邊に朽つるとも
心は赤き日本魂

○

加屋　霽堅　肥後熊本人也、初メ榮太ト称ス、性廣直剛毅、敬神ノ志、最モ深シ、夙ニ勤王攘夷

一死報故人杵臼流亜

以寡破衆不死不能

ヲ唱ヘ、京摂ノ間ニ奔走シ、平野次郎等、播州姫路ニ於テ、討幕ノ大義ヲ、島津久光ニ説クヤ、加屋亦タ其党中ニアリ、大政復古ノ偉業、與テカアリ、後常ニ家居、信神ノ子弟ヲ集メ、自カラ敬神党ト名ケ、太田黒伴雄、上野堅固ト、之カ魁首タリ、明治九年春、冨永守國、阿部景器等ヲ、筑前秋月ニ遣シ、益田静方、宮嵜車之助、等ノ紹介ヲ得、長州前原一誠ト密謀シ、共ニ大事ヲ挙ケンヿヲ約セシメ、同十月二十四日夜半、党類百五十余名ヲ率ヒ、将ニ鎮台兵營ヲ襲ハントシ、高津運記ニ、熊本鎮台司令長官種田少将ヲ、吉村義節ニ、安岡縣令ヲ殺サシメ、自カラ大薙刀ヲ揮ヒ、衆ヲ鼓シ、營ヲ斫ル、事不慮ニ出ルヲ以テ、營中大ニ乱レ、台兵士官ノ死スル者、幾百人ヲ知ラス、營ニ火シ、益々奮鬪、手カラ一士官某ヲ擒ヘテ曰、銃器弾薬ノ所在ヲ知ラシメハ、為ニ其生ヲ與ヘント、某之ヲ諾ス、加屋行ク數歩、某洋刀ヲ抜キ、後ヨリ其脛ヲ傷ク、加屋大ニ憤リ、薙刀ヲ揮ヒ、之ヲ仆シ、挺進御花苑ニ達ス、時ニ台兵ノ一隊、列ヲ整ヘ、均シク銃ヲ発ス、弾丸叢

男子知男子心身亦死魂魄永守此土

注、終ニ之ニ死ス、時年四十歳、曾テ人ニ謂テ白、古人有云、斃而後已ト、嗚呼是レ何ハ言ソ、一死以テ已ム、男子ニ非サル也、夫レ真男子タル者、縱令ヒ身逝クト亦氏、魂猶ホ此土ニ存シ、七生万生、以テ玉懐ニ敵ス、此是ヲ云フ也ト、宜ナル哉、砲彈五六、其躰ヲ貫クモ、屹然動カスシテ死スト云ス

○

除夜卧病

日月如過客、浮生夢一場。雙鬢分黑白、二竪入膏肓。

豈恐銭神祟、深憂劍氣亡。無衣又無褐、何以卒年光。

一月一日

新歴先寒旧歴餘、回頭人事総蕭疎。厚顔負債謾除酒、赤手拂霜絶摘蔬。偃蹇空抱渡江志、疣痾更讀養生書。聞言潮海風波悪、誰提宝刀戮鰐魚。

逸題

農業倚産為身圍、嘆看士氣日々枯。群児勿怪吾謀拙、浦漁橋畔托漁徒。

數字の頭音ゐて

一人ちいさ僧みぬるとも謗るとも

一　我赤心も神も知ぬる

二　古き世よ溯るとも名のみよろ
　　只降り行く御世を哀しき

三　皆人も身を榮へのみ思ふ世よ
　　如何で命を仇で捨へき

四　世の中も乱れよろりな上下の
　　別ちも非ず神にたれつゝ

五　何時までか徒よ世を暮へき
　　思ひしことを今も遂ばや

六　むつうしの世よもあるゝな政事
　　事と心も違てゝ見由

七　かき跡の事も心よ掛れとも
　　妻子も家も思ふ時あも

八　耶蘇といふ夷と嫌ふ下風よ
　　靡けともあな情かの世や

九　志し相逢ふ友も誰れも唯
　　君と國とを思ふはゝりに

十　問もきりし事こそ悔れ位山
　　のぼりつめたる人の心も

題しらず

憂世おバ忍ふの岡ま逃れ出て
巌折り喰む時も来まけい
君ず為めこゝろ赤間ゑ関路まて
落ちし昔ゑ忘れはてゝや

辞世
仇ありと人ゑ咎めそ紅葉ぞの
散こゝろ赤き心なりせゑ

○

武部ポ四郎　筑前ノ人也弘化三歳次丙午ノ年第七月ヲ以テ福岡城外通町ニ産ル

父子為雙

豪膽壮氣真是見死如歸者也

容顔秀麗音吐清朗本ト建部ト稱ス後チ自ラ武部ト改ム、初メ燕之允ト称ス、蓋シ、燕雀何ソ知ニ大鵬之志ヲト云ヲ取ル也、父、建部武彦、夙ニ尊攘ノ大義ヲ主張シ、幕譴ヲ蒙リ、慶應元年十月、加藤司書、衣非茂記、齋藤五六郎、以下數十人ト、本藩ニ刑セラル、武彦ノ刑場ニ赴クヤ、時刻尚ホ未タ早キ、家人ヲ召テ曰、姑ク休憩セント欲ス、此座豈ニ酒肉ノ興ヲ欠カンヤ、仍テ満酌、談笑戯語、傍人ヲシテ愁傷ノ情ヲ轉シ、抱腹セシ

東情可想不堪一讀

ムルニ至ル、已ニシテ醉臥ス、劇息雷ノ如シ、其屠腹スル、殆ト瓜ヲ割ルカ如シト云フ、此夜、友人某、武部ノ悲歎號泣ヲ察シ、密ニ之ヲ問フ、更ニ憂色ナク、却テ嗤笑自若トシテ曰、冠履顛倒、玉石混淆、澆季ノ弊習、大笑ニ堪ヘスト、先是三條實美以下四卿、筑前太宰府ニ在リ、時ニ國論紛々、尊王佐幕ノ兩岐ニ跨リ、有志ノ徒、憤懣慷慨、激論沸騰、脫走シテ長州ニ入ル者數十人、茲ニ至リ、脫士藤四郎、書ヲ武部ニ送テ曰、斷而

奇士有奇象

行ヘハ鬼神之ヲ避ク、聞ク本藩幕吏ニ諂ヒ、勤王ノ士數人ヲ殺スト、我党、今日正シク斷行スヘキノ時運ニ際會ス、願クハ太宰府ノ五卿ヲ、本國犬鳴山、黒田家別館ニ奉迎シ、討幕ノ義旗ヲ翻スノ準備ヲ為セ、予又不日歸國セント欲スト武部大ニ其意ヲ好スト雖、囚窓ノ下ニ鎖サレ、曾テ策ノ施ス可キナクシテ止ム矣、為レ人、軀幹長大、兩足ノ跟ニ白形アリ、左ハ滿月、右ハ蚕眉ノ如シ、夙ニ大志アリ、率美虚飾ヲ好

マス、破袴長劍、常ニ巨大ノ木筒煙管ヲ提ヘ、自ラ生テ不レ食ハ二五鼎ニ死テ烹レン二五鼎ニ耶ノ句ヲ刺ス、其書ヲ讀ム、字義章句ニ係ハラス、啻、大意ヲ取ル耳、武亦然リ、項羽ノ所レ謂劍者一人之敵不レ足レラ学ニ万人之敵欲レ学ト ノ句ヲ愛翫ス、資性、深沉大度、温乎タル其貌、人見テ以テ親ミ易ク、侵ス可カラス、一縣ノ人望、最モ高シ、明治三年、久光忍太郎ト、鹿児島ニ遊フ、途、田舎ノ一小店ニ憩ヒ、茶菓ヲ喫ス、懐ヲ探テ孔銭ナシ、乃チ十圓紙幣ヲ與ヘ、計

其行非凡

卓絶歴人

算ヲ托ス、店主、返剰ノ蓄ヘナキニ苦ム、於レ爰、其十金ヲ投シテ去ル、明治七年春、前参議江藤新平、ノ征韓ヲ佐賀ニ唱ヘ、兵ヲ起サントスルヤ、武部單身馳テ、肥前ニ赴キ、石井貞興等ト相謀リ、大事ヲ筑前ニ勃興シ、其志ヲ賛ケンヿヲ捨ヒ、歸リ来レハ、士族ハ一般、朝旨ヲ奉シ、將ニ佐賀ヲ討タントスルノ時ナリ、武部論議百方、其不可ヲ示シ、江藤ニ應シ立タントス、然レ𪜈、勢遂ニ克ツ能ハス、歎シテ曰、世上皆眈焚ハ

無限感慨

人ナリ他日自ラ撹醒シテ悔ユル勿ルト快々トシテ深山ニ遁レ去リ復タ人ヲ不レ見明治八年春、板垣前参議等ノ、大坂ニ會スル、武部出テ、板垣ヲ訪ヒ、其民權擴張セサル可カラス、地方人民連絡セサル可カラストノ論意ニ同シ、且ツ同八月、愛國社ヲ、東京ニ設建スルノ議ヲ喜ヒ、歸テ越智彦四郎久光忍太郎、箱田六輔、等ト謀リ、矯志社ヲ結フ、衆武部ヲ推シ、社長ト為ス、時ニ越智彦四郎、別ニ一社ヲ結フ、之ヲ名ケテ強忍社ト云フ、箱田

不得已難

自任何深

六輔少壯ノ者ヲ團結シ、之ヲ堅志社ト呼フ、於是乎、三社鼎立、競爭ノ精神、漸ク生ス、是レ將ニ福岡人心、一新セントスルノ時運ナリ、武部旅裝ヲ齊ヘ、東上愛國社ニ會セントス、忽チ板垣ハ參議ニ任セラレタルヲ聞キ、嘆シテ曰、嗚呼止ン矣、天下ハ事ハ自ラ謀ルニ如カスト、爾來拮据勉旃、士心ヲ激励ス、同九年十月、熊本萩ノ事起ルニ當リ、福岡ノ人心、稍ヤ動ク、武部衆ヲ喻シテ曰、予ヤ諸君ニ忤フ者ニ非ス、既ニ今日事言論ハ以テ挽回ス可カラザルヲ知ル、然

レ氏時機ノ猶ホ早キヲ如何セン、請フ諸君暫ラク、心ニ克テ、機ノ到ルヲ待テ、衆則チ諾ス焉

同十年一月、矯志、強忍、堅志、三社合連シテ私学校ヲ建ツ、之ヲ十一学舎トス、同二月、鹿児島ニ在リシ、堅志社員某、帰郷シ、不日該地ニ事アルヲ報ズ、後西郷隆盛、桐野利秋等、大兵ヲ率シ、肥後ニ闖入スルヤ、福岡ノ士民、頗ル動揺ス、乃チ三月七日、越智彦四郎等ト、兵ヲ挙ケンヿヲ議決ス、久光忍太郎、急ニ兵ヲ起サント欲ス、武部可カス、同三月十九日、越智彦四郎、久光忍太郎、

舌間慎吾、加藤堅武、久世芳麿、村上彦十、大畠太七郎、月成元雄、吉安謙吾、舩越平九郎等ト、平尾村、宀観世音（距福岡城里許）ニ會シ、標ヲ投シ、大隊長ヲ定ム、衆乃チ武部、越智ヲ撰ム、以下副官小隊長ハ、大隊長ノ獨断ニ任ス、武部大隊副官ヲ、舌間慎吾ニ任シ、壮士ヲ募集セシム、同二十六日夜半、越智ニ會ス、越智曰、同志漸ク集リ、勢制止スヘカラス、此時ニ當リ、彊日弥久セハ、恐ラクハ變ヲ生セン、如カス急ニ事ヲ挙ケンニハ、武部猶、時到ラサルヲ執テ可カス、同二十七日、武部

已知不成而報友真箇知己衷情不想

越智ヲ訪フ、越智曰、弟等、今夜卒ニ兵ヲ擧ケントス、兄、猶前説ヲ信セハ、意ニ任ス可シ、弟命ヲ聞ク能ハサル也、武部沉吟シテ曰、彈藥乏シク、銃器整ハス、固ヨリ功ヲ奏スル能ハサル、瞭々掌上ニ見ル可シト雖モ、義ヲ存シテ死ス、其成敗ニ至テハ天也、豈ニ豫メ成ラサルヲ憂ヘ、遂ニ輟テ以テ後日ヲ俟タン哉、則チ之ヲ諾シ、共ニ軍略ヲ定ム、隈熊本鎮台分營、福岡城ヲ奪ヒ兵器彈藥ヲ襲ヒ縣廳ヲ掠メ公金ヲ乘テ勢ニ而奪ヒ博多港（距福岡一衣帶水也）所ニ碇泊スル軍艦直ニ衝キ大坂ヲ入リ西京ニ清メ君側ヲ擧ケ奮英ヲ改

從古坐策多失敗天下事成猛進可戒

革ム政体ヲ是其一也、虜ヒ掠奪スト兵器及官金ヲ而モ不レ能ハ取ル軍艦ヲ則チ據リ福岡城ニ阨シ官軍、粮道ヲ為ス薩兵、声援ヲ是其二也、二者皆ナ不レ克ハ則チ纏メ兵ヲ於大休山（距城七丁）向ヒ南関ニ（當時官軍本営）衝ク官軍ノ背後ヲ是其三也、又豫メ軍ヲ別テ二隊トシ、同二十八日、午前第二時、越智彦四郎、西方ノ兵四百ヲ率ヒ、台城ヲ衝キ、武部自ラ東方ノ兵、三百余ヲ率シ、縣廳ヲ襲ハントス、約シ、副官舌間慎吾ニ報シテ曰、今夜前二時、事ヲ擧ケントス、豫テ募集セシ、兵士ヲ住吉村（在城郭外）住吉神社ニ嘯集スヘシ、武部至ル、舌間曰、事忽卒

一言深洲

悲壮又豪懐

ニ出ス、徧ク報セントト欲スレ𪜈、時期ノ在ルアリ、故ニ僅ニ十五六人ヲ擁シテ會ス焉、武部天ヲ仰キ、嘆シテ曰、是レ命數也ト、黙シテ語ナシ、暫之、黒烟西天ニ漲リ、海風突喊ノ声ヲ傳フ、武部頭ヲ仰ケ、励色シテ曰、越智已ニ城ヲ衝ク、予兵火キノ故ヲ以テ、機ヲ誤マルニ忍ヒン、今日ノ事死アル而已、何ノ功カ、是レ希ハント、自ラ杯ヲ把リ、樽酒ヲ酌ム、衆之ニ倣フテ訣シ、神社ヲ去ル、數十歩、同志某西方ヨリ馳セ来リ、告テ曰、火光ハ城中ニ非ス、城外ナリ、越智彦四郎已

ニ城ヲ拔ク能ハス、民舍ニ火シ、大休山ニ退ク知ルヘシ、寧ロ此ノ寡兵ヲ以テ、縣廳ヲ衝カンヨリ、大ニ後圖ヲ為スニ如カス、武部謂ラク然リト、乃チ古間慎吾ニ命シ、豫メ約シタルカ如ク、大休山ニ到ラシメ、獨リ再挙ヲ試ミント欲シ竊ニ壯士ヲ嘯集ス、將ニ成ルニ垂ントシテ、又敗ル、再来變現出没晝伏夜顯、捕吏ト虫𪜈、其所在ヲ尋ルニ苦ム、況ヤ其他ヲヤ、一日濱男村距福岡二里其地勢後山前水只有一路耳ニアリ、捕吏其異状ヲ怪ミ誰何ス、武部詐テ曰、奴ハ商買某也、捕吏曰、

奇智能脱釜中

シテ然ラス汝武部ニ非スヤ何ソ武部戰慄ス
ル為シテ曰武部トハ彼ノ福岡暴徒ハ巨魁タ
ル武部小四郎ニ非スヤ奴何ソ當ラン捕吏尚
怪テ之ヲ家主ニ問ハント欲シ階ヲ下ル武部
隙ヲ窺ヒ屋ニ登リ海濱ニ出テ面ヲ掩ヒ群小
児ハ中ニ接テ泥ヲ手ニシ螺ヲ拾ブ捕吏等徧
ク其側ヲ求ムレモ不得遂ニ虎口ヲ脱ス後其
採取スル所ノ螺ヲ家ニ贈リ今尚存スト云フ
同年五月二日ノ夜遂ニ博多ニ縛セラレ同三
日ノ夜斬首セラル時ニ年三十年十一ケ月墓

勇壓義平

知命英雄有何人

官軍尚如此乎

ハ箱崎十里松原中ニ在リ初メ警吏漸ク其所
在ヲ知リ數十人屋ヲ環テ之ヲ圍ム武部曰汝
等カヲ以テ我ヲ執ヘント欲スル乎何ソ速カ
ニ来テ力ヲ較セサルト立トコロニ蹶起數人
ヲ仆シ大笑シテ曰命窮リ矣運尽リ矣嗚呼又何ソ
無用ハ勞ヲ為サン執ヘント欲セハ則チ執ヘ
ヨト自ラ雙手ヲ腰ニシテ待ツ吏忽チ馳セ集
リ靴ヲ擧ケテ以テ其面ヲ歐ツ流血淋漓從容
不動ト雖モ心ニ其無状ヲ憤ル其刑場ニ臨ム
顔色自若吏其言ハント欲スル所ヲ問フ曰汝

從容自若臨死思天下世間能幾人乎

曾聞血液運行如平日即身首異處而其体不倒矣今於武部初見焉

今将タ何ヲカ言ハン、只願クハ諸君カヲ國家ニ竭サンヤ、首ヲ授ケントシ又曰、請フ之ヲ、世ノ有志者、且豚児ニ傳道セヨ、身ヲ殺シテ國ニ殉ヒ、私ヲ營テ義ヲ忘ルヽ勿レト、一言ノ私事ニ及フナシ、身首已ニ離ル、然レ氏其骸體屹トシテ倒レス、警吏某曰、予武人ノ刑殺セラルヽヲ見ル、枚挙ニ暇アラス、而メ武部ノ如キ、斬戮セラレテ、身體ノ紊然タルハ、嘗テ見サル所也、平昔、養フ所ロ、他ニ異ナルアルニ非スンハ、何ソ能ク斯ノ如クナランヤ、嗟、惜哉、此ノ偉丈夫ヲ亡フト、為ニ一點ノ暗涙ヲ滅キシト云フ、

落花無情使此人見

潜伏中作

長剣元期斬大蛇如何雄畧属煙霞反人又灑賓王淚暫對春風見落花

初覚人間梦裡遊無情山水却含愁春宵露卧櫻花下憶起當年平薩州

辞世

世の中よ満ち潮ハ欠る十六夜の
月ぬ名残ゝ露ほどもなし

川越庸太郎　筑前福岡ノ人也、資性、閑雅ニシテ

氣慨アリ、夙ニ鹿兒島ニ遊ヒ、桐野等ト交ル、越智彦四郎等、強忍社ヲ組織スルニ當リ、與テ力アリ、明治十年、十一學舍ノ新興スル之カ幹事ト為リ、頗ル校務ヲ執掌ス、薩ノ警報達スル、越智等ト謀リ、腹脊官兵ヲ攻擊スルノ策ヲ齎シ、三月十六日、吉田某ト薩軍ニ肥地ニ投ス、然ルニ、病痾、毎ニ身體ニ纏ヲ以テ、西郷ノ本營ニ附屬シ、時ニ出テ中隊ヲ指揮ス、後チ永井村ノ重圍ヲ破リ、城山ニ入リ、九月廿四日、拂曉、西郷等ノ斃ヲ聞キ、曰、天下ノ事逝ルト遂ニ從容刄ニ伏シテ死ス時ニ年廿四年九月

失題

山禽叫絶水聲喧。點々青燐去有痕。塵外猶懷塵世慨。臥牛山下月黄昏。

宮崎真鄕　肥後熊本人也、初メ八郎ト稱ス、磊落不羈ニシテ大志アリ、徧ク書史ニ渉リ、最モ力リハルシ」ノ為人ヲ慕ヒ、私ニ東洋ノ民權ヲ恢復スルヲ以テ已レカ任トス、明治三年春、藩命ヲ以テ、東都ニ遊学シ、幾干ナクシテ召歸サル、曰、丈夫志ヲ立ル、豈ニ途ニシテ已ンヤ乃チ自任何重乎

一讀冷汗

活眼

笈ヲ負テ、再タヒ東都ニ入リ、英人某氏ニ従テ、語学ヲ修メ、又西周ノ門ニ入テ、万國公法ヲ講シ、痛ク吾邦、外交上、國權ヲ撓ムル事ヲ憤ル、同六年十月、廟堂俄ニ征韓ノ議ヲ沮ミ、西郷等ノ職ヲ罷ルヤ、慨然トシテ曰ク、事此ニ至ル、國權弛張ノ関スル所、決シテ坐視ス可ラス、大擧シテ征韓ノ断行ヲ請ハント、池松豊記ト共ニ謀テ、東京ヲ去リ各地ノ同志ヲ結合シ、會期ヲ約シテ帰京ス、時ニ人アリ、岩倉右大臣ヲ暗撃ス、官以為ラク、宮崎等ノ所為ナリト同志數人ヲ

江藤敗後一旬八州將破裂

決死則生幸生則死

繫縲シ、糾問甚タ急ナリ、事解ルニ及テ、即日、連署征韓ノ万已ム可ラサルヲ、左院ニ建議ス、其詞極テ激昂、于時七年一月ナリ、偶マ、佐賀ノ警報至ルニ逢ヒ、走テ郷ニ還ル、未タ達セスシテ、江藤ノ事、全ク敗ル、是ヨリ先キ、平川惟一、有馬源内、等モ亦本縣ニ於テ、衆ヲ集メ、將ニ為ス所アラントス、其氣熾中止ス可ラサルヲ以テ、共ニ台灣ノ役ニ赴キ、號シテ徴集隊ト云フ、日支和議、成ニ及テ、單身留テ、支那ニ遊ハンヿヲ、西郷都督ニ請フ、西郷許サス、斑師ノ後、怏々樂マ

文運日進時何等之怪事

ス、以為ク、已ムヲ得サルノ點ニ出テスンハ、我邦ノ獨立ハ遂ニ期ス可カラスト、益民權ヲ主張シ、中学校ヲ肥後植木驛ニ設ク、人、号シテ征韓学校ト云、縣官、甚タ之ヲ嫌悪ス、遂ニ校ヲ閉ツ、八年六月又東京ニ到リ、留テ時弊ヲ痛論ス評論新聞、湖海新報等多クハ其手稿ニ掛ル、同九年、秋鹿児島ノ擧動、常ニ異ナルヲ聞キ、又去テ鹿児島ニ赴キ、西郷、桐野等ト、深ク義交ヲ結ヒ、爾後屢々、肥薩ノ際ニ往来ス、十年ノ擧、率先シテ、同志ヲ編製シ、協同隊ト名ケ、戰ヒ最モ勤

真是両軍勝敗岐路

ム、後、桐野ノ依托ヲ受ケ、逸見十郎太、ト共ニ兵ヲ鹿児嶋ニ徴集シ、將ニ熊本ニ出ントシ、路、官兵ニ、八代ニ逢フ、逸見曰、此寡兵ヲ以テ、彼大軍ニ當ル、曾テ勝筭ナシ、寧ロ退テ、後圖ヲ為スニ如カスト、宮崎曰此ヲ去ル一歩、薩軍ナキナリ、君去ント欲セハ去レ、我ハ能ハスト、手ヲ戟ニシテ、奮戰シ、遂ニ彈丸ニ觸テ死ス、時年二十六歳ナリ、

出郷

桑弧蓬矢男児志。事業不成吾豈還月也花耶到處

大鵬未翔天而死悲哉

壯快雄絶

好埋骸何必故郷山

述懐

弱之肉即強之食。虎伏龍起何有極。先者制人後者制復是人間一場奕。一日白人起洋西。奇巧動奪造化力。火氣奔船電通信。横行宇内恣豪逸。人生區々何足論。及時須展垂天翼。平生自期掃清功。轉禍為福豈無術。君不見聯邦長和盛頻。剗除殘賊布至德。又不見魯西亜帝伯得羅。定立國基闢荊棘。苟且由来引百廢。事有機宜不可失。嗚呼何時國光被遠邇。百王畢而四海一。

磊落下轟吞千古

觀破人事絶妙

悲壯交至

失題

取快一時何顧死。此心磊落淡於水。秦嬴政佛拿破翁。此是千秋好男子。

世事何曾問是非。青山滿目白雲飛。一鐘衝破千年夢。初覺機中又有機。

台灣從軍

國家大計動誤機。天下向誰説是非。萬里風濤遠征客。空將暗涙灑戎衣。

獄中作

有花有花春又春。々日已尽不知春。獄裏無花々常

在胸中畜得充分春。

汪洋萬里志

立志歌

壯圖大於天只應赫々蓋一世芳名明於日只應巍々傳千歳男児従来貴志氣須養拔山倒海勢君不見亜歷山王鉄木真彼何人也我何人有為之志剛且堅豈莫奇策奏奇勲裏屍馬革固其分生歟死歟不顧身天下紛々何足畏虎闘狼睨渾快事君與同志君努之誓以丹心立大義嗚呼立志之歌々一関猛風暴雨満天地

筆端生腥風

聲在耳

送友人某遊支那

朝上呉山第一峯夕航楊子水千重想君客梦知何處落月寒山寺裡鐘

蘆驢可瞑

讀民約論

天下朦朧皆梦魂危言獨欲貫乾坤誰知凄月悲風底泣讀蘆驢民約論

頂刃應避三舎

明治九年将發東京留別諸友

男子立志豈言論一死只應答國恩蓋世壯圖何日力奏笑而睥睨大乾坤

帰るさよ故郷人の事とかい

隅田砂月も冬さびよけり

真男児氣象

○高津運記　肥後熊本人也、明治九年十月二十四日夜半、加屋霽堅、兵ヲ起サント欲シ、先ツ高津ニ命シ、同鎮台司令長官種田少将ヲ斬ラシム、高津其邸ニ梯シ、窃ニ其寢床ヲ窺フ、少将、酣睡死人ノ如シ、乃チ入リ、其枕ヲ蹴リ、提醒セシム、少将、洋刀ヲ拔ク、未タ半ニ及ハスシテ、頭顱已ニ膝下ニ落ツ、高津出テ玄関ニ至ル、婢奴小棒ヲ提ケ、呼テ曰、主人ノ仇、赦ルス可カラスト、痛ク其左肩ヲ搏ツ、顧ミ笑テ曰、其勇愛スヘシ、去テ大ニ城中ニ戰ヒ、後終ニ擒ヘラレ、同年十二月三日、吉村義節、浦楯記、ト共ニ斬ニ熊本ニ死ス、

辞世

幾度も生れ来て猶夷等を
うたで止むへきやまと塊

○永岡久茂　陸奥會津ノ人、性奇偉倜儻、喜テ四方ノ豪傑ニ交ル、幼ニシテ父ヲ喪ヒ、長シテ笈ヲ負ヒ、江戸ニ游ヒ、昇平学校ニ入リ、畧ホ百家

不勇士
不能

ノ史ニ渉ル、戊辰ノ春正月、伏見之役、砲兵組頭ニ抜擢セラレ、兵ヲ率テ橋本驛ニ進ミ、官軍ヲ逆ヘ撃テ利アラス、浪花ニ退ク、次テ藩主松平容保ニ従ヒ、東帰ス、容保藩士ヲ率テ、封土ニ就クヤ、永岡独リ江戸ニ駐リ、形ヲ潜メ、官軍ノ挙動ヲ伺ヒ、且ツ米澤藩ノ名義ヲ假テ、西洋銃若干ヲ贖ヒ、官軍充塞ノ中ヲ過キ、本藩ニ遞送ス、後静ニ江戸ヲ去ル、曾テ一人ノ之ヲ怪ム者ナシ、奥羽同盟ノ議興ルヤ、藩命ヲ奉シ、加賀ニ赴カントシテ、越後ニ達スル比ヒ、官兵既ニ陣シ、

道路不通、是故ニ該地屯營ノ會軍中ニ投シ、之カ参軍トナル、時ニ大隊長、古谷作左衛門、指揮其宜ヲ得ス、兵声甚振ハサルヲ以テ、抜カレテ副大隊長ト為リ、長州前原一誠ノ兵ト戰ヒ、互ニ勝負アリ、前原當時窮ニ其謀畧ノ奇ナルニ感スト云、幾干ナク君命ヲ以テ若松ニ還リ、奥羽連合ノ本部ナル、仙臺ニ赴キ、上野宮ノ参謀ト為ル、次テ越後破レ、諸墨抜カレ、榎本鎌次郎等、軍艦ヲ率ヒ、仙臺ニ至ルヤ、参謀等皆其艦ニ搭シ、去テ函館ニ赴クト雖モ、永岡独リ去ラス

為君家不知身

苦心何堪

是蓋シ、藩主ノ死生、未タ知ラス、會城ノ存亡、未タ測ル可ラサレハナリ、後窃ニ會城ニ入ラントシ、百方道ヲ求ムレ𪜈、官兵城ヲ圍ム、鉄桶ノ如ク、曽テ寸隙ナシ、空ク恨ヲ呑テ、草莱ニ潜ミ、恢復ヲ謀ル、容保、降ヲ軍門ニ乞フニ當リ、家ニ帰リ謹慎ス、後東京ニ致サル於此乎、始メテ親シク、前原ニ面シ、昔日仇讎ノ情ヲ談シ、相待テ義交ヲ結フ、會藩更ニ、封ヲ斗南ニ賜ハル、ニ及テ、之カ議員ト為リ、又参事ニ任セラル、後職ヲ辞シテ東京ニ家ス、常ニ自カラ謂テ曰、予生

股間忍愧

ヲ偷テ、降ヲ軍門ニ容レタルニ非ス、思ハザリキ、忠義ノ舉、却テ不正ノ名ヲ蒙リ、藩祖ノ廟ハ、他人ノ為メニ毀タレ、主公辱メラレテ、國家亡フ、又何ノ面目有テ、先君ニ地下ニ見ヘン、故ニ復ヒ、我義魂ヲ天下ニ表セント、欲シテ今日アル也ト、明治六年、征韓之議、内閣ニ決スルヤ、桐野利秋ト相謀リ、共ニ先鋒タル可キヲ約スルモ、後征韓ノ議破レテ已矣、佐賀ノ事起ルニ當リ、志ヲ齎シ鹿児島ニ入ルト雖モ、事遂ニ諧ハス矣、越テ七年、討台之役アル、又先鋒タラント

至情溢紙上

欲シ、先ツ同志十餘人ヲ、徴集隊ニ加ヘテ發セシメ、漸次其後ヲ續カントセシニ、中道ニシテ瘁ス、人皆其故ヲ知ラス、或ハ云、此時既ニ望ヲ政府ニ斷チ、專ラ私黨ヲ樹ツルニ、汲々タレハ也ト、明年春、母長逝ス、永岡悲哀不啻、日ニ香花ヲ供シテ他事ヲ不顧、永岡幼ヨリ、鄉里夙トニ至孝ノ称アリ、悲痛人ニ超ユル亦宜ナル哉、是歲夏前原一誠ノ辟ニ應シテ東上シ來ルヤ、永岡之ト議シテ曰、方今、政其政ヲ失ヒ天下ハ蒼生虐政ニ憔悴スル久矣、苟モ血性アル者誰カ

此衰頽ヲ挽回スル、ヲ欲セサル者アラン、ヤ民人ハ怨望亦極矣此之時ニ當リ、陳勝其人ノ如キ者、一人劍ヲ揮テ起タヽハ、郡縣ノ豪傑、雲集霧合大事速ニ為ル可キ也、今郡縣中、其人ヲ數フルニ、秋月ニ増田静方ナル者、越後ニ大橋清賢、會津ニ山室鉄四郎、高橋繁信、悉ク數フルニ勝ヘスト雖モ、豊津、佐賀、熊本、中津、鳥取、地方其人多シ、此輩、君檄ヲ傳ヘテ致ス可キ也、君斷シテ疑フ勿レ、前原曰善シ、遂ニ辟ニ應セスシテ去ル、明年八月、長州人、玉木正誼、前原ノ意ヲ受

ケ、永岡ヲ過キ謂テ曰、先是肥後敬神黨ト相會シ、一戰シテ熊本台兵ヲ鏖ニシ、進テ九州ヲ席捲セントス、開戰ノ期其レ近キニ在リ、君蓋シ若松ニ至テ、壯士ヲ嘯集セサル、我、君ト共ニ行カン、永岡曰ク、誠ニ然リ、然而メ日夜熊本ノ報ヲ待ツ、日アリ、十月二十三日ニ至リ、突然電報アリ、「タ子ァケ」二十五六日頃開店、齋藤某ト、是レ蓋シ、熊本一舉ヲ言フ者ニシテ、齋藤ト称セシハ、前原カ故ラニ、其名ヲ偽リタルナリ、永岡此報ヲ得ルヤ英氣滿衝大ニ呼テ曰時至レ

リ機来レリ疾ク斷シテ失フ可ラズト、乃チ青森縣士、一柳訪、中原成業、能見鉄次、中根米七、島根縣士、松本正直、靜岡縣士、高久新三、宮嵜縣士、滿木清繁、岩手縣士、井口慎次郎、等ヲ招キ、大事ヲ成サン「ヲ談ス、衆皆奮テ之ニ從フ、然レ共、當時其名ハ、同志ト唱フル者、數多アリト雖モ、往々中心、怯懦、共ニ謀ルニ足ラス、況ヤ、政府ハ間諜ト、称スル者其間ニ出沒シ、加レ之金穀又乏シ、到底都下ノ地、雄ヲ展フルニ足ラス、寧ロ千葉縣下ニ侵入シ、曾テ同志者ナル警吏某等ヲ

紙上尚発悲声

説キ、併セテ佐倉鎮台少佐某モ、曽テ心契相投スル者ナレバ、立談ノ間ニ、其兵士ヲ借リ、巡査ヲ編整シ、縣令参事ヲ襲殺シ、縣廳ヲ屠リ、公金ヲ奪ヒ、風馳シテ諸道ノ壮士ヲ駆リ、若松ニ出テ、仙臺台兵ヲ奪ヒ、若松ヲ根據トシ、大ニ為ス有ルニ如カスト、二十九日、各、刀剣ヲ懐ニシ、夜来ヲ期シテ、思案橋ニ會シ、解纜ノ船ヲ儌ヒ、千葉縣登戸ニ至ラントス、期既ニ逼ルモ、船未タ出テス、屢々之ヲ促セモ、柁工言ヲ左右ニ托シテ可ス、東台之梵鐘ハ、空ク哀ヲ含テ、既ニ前一

自覚身慄

時ヲ報ス、時ニ警吏寺本義久巡査二三ヲ率井来リ、将ニ之ヲ執ヘントス、永岡等、拒クニ詰ナク、上陸シテ事ニ應ス可シト、思案橋畔ニ上ルヤ否ヤ、井口慎次郎、大喝シテ曰、汝異ナル哉我刀ハ利鈍ヲ試ムルヲ願フ乎電光一閃忽チ警吏ヲ斫ル、永岡及ヒ、一柳訪、中原成業モ亦次テ警吏ヲ斃ス、恰モ一小戰争場ノ如シ、時ニ永岡ノ腰、痙シテ歩行シ得サル者、井口ノ剣鋩誤テ其肱ニ觸レシヲ以テナリ、於此乎、余衆ヲ散シ、独リ井口、一柳、中原、ト空舟ヲ奪ヒ、流水ニ任セテ、

如何情

榮久橋ニ至ル、警吏之ヲ知リ、圍ムヿ三四、永岡謂ヘラク、命極矣、從容縛ニ就キ、多年ノ宿志ヲ吐露シ、骨ヲ刑場ニ曝スモ、晩カラス、乃チ捕ヘラレテ、獄ニ下ル、明年一月十二日、前原一誠ノ斬セラレシヲ聞キ、大声蹶起、金創迸裂、遂ニ逝テ歸ラス、齡ヲ保ツヿ、四十年

憤懣可思

○

慷慨動人

戊辰役、奉藩命、使於白石、會聞會城陷、乃作一絶。

一木誰支大厦傾、三州兵馬亂縱横、羈臣空灑包胥淚、落日秋風白石城。

東京今戸寓居雜吟

捧盤殷血宮城野、横槊賦詩北越州、今日墨陀堤畔岸、秋風獨上釣魚舟。

英雄未路可悲

悠々自適

罷釣門前繫釣舟、携魚携酒又登樓、三杯未盡陶然醉、々臥清風明月秋。

斯丘斯水兩清閑、魚鳥亦能容我頑、獨恨隣樓當舍北、望中遮却筑波山。

傾欹茅屋枕流斜、魚尽可罟酒可賒、君去為誇城市友、滿江風月泊漁家。

真個知已

無限悲切

一読潸然

寄奥平居正

景慕幾年勞夢思未能面識已心知。世忠湖上騎驢日。李泌山中衣白時。弄月吟花君自得。賣刀買憤我何疑。此間援濟將倚孰。二萬生靈正泣饑。

偶題

天外零落歳將闌。壯士致身欽作肝。姜里蒙難豈害伯。下邳滅跡為酬韓。可堪慈母頭無白。欲吊同朋骨已寒。吾正悲歌離擊筑。旅窓風雪夜漫々。

○

竹村　秀俊　會津人永岡久茂ノ徒也、明治九年七月永岡ノ命ヲ奉シ、長州ニ使シ、前原一誠ト、暗號ヲ分チ、東西擧兵ノ緩急ヲ、相報セントヲ約ス、同八月二三同志ト太政官ヲ襲撃シ、大臣参議ヲ刺殺セントスレ共、永岡其不可ヲ持スルヲ以テ止ム、同九月越後ニ赴キ、豫ノ同志ナル、同國人大橋清贇ト、兵ヲ北越ニ擧ケ、永岡、若松ニ帰リ、共ニ猗角ノ勢ヲ張リ、大事ヲ為サンコヲ謀ル、議乃チ諧フ、同十月、此ノ事ヲ、在東京ナル、永岡ニ報セント、越後ヲ去ル、先是永岡、前原一誠ノ電報暗号ヲ得、若松ニ帰ル、路終ニ

悲哉

擒ヘラル、竹村未タ之ヲ知ラス、同月三十一日東京三谷堀ニ達ス、捕吏忽チ之ヲ縛ス、明年二月十二日井口慎二郎、中原成業ト、刑ニ東京市々谷ニ死ス、實ニ年三十二、

辞世

白露と消る命も惜まねと
猶思はる、國のあくすべ

○

井口慎次郎　會津ノ人也資性活潑、小節ニ拘ハラス、後筑ヲ負ヒ、東京ニ遊ヒ、同國人、永岡久茂ト、善ク交ル、明治九年十月、前原ノ兵、起ルニ及ヒ、永岡等、十余人ト、千葉縣ニ赴カントシ、途終ニ縛セラレ、明年二月十二日、竹村秀俊、中原成業ト共ニ東京ニ刑死、時ニ年二十三、

辞世

碌々偷生ヲ我カ所慙年卒二十已ニ加ヘ三精神百折不曾撓報國挺身即是男。

○

中原　成業　本名、樋口忠三良、旧會藩脱士也、明治九年、十月二十九日、永岡久茂ト、千葉縣ニ進

入セントシ、路東京永久橋ニ捕ヘラレ、明年二月十二日、井口、竹村、ト東京市谷ニ斬セラル、實年五十二、

辞世

今年あらハ又魁うけん國の為め
我たましひを此ゝ残して

○

舌間慎吾　筑前福岡ノ人、性、廉直ニシテ勇悍、細事ニ拘ハラス、武技百般ニ通シ、最モ柔術ニ妙ヲ古ム、後同藩文武舘、柔術ノ師範ニ撰任セラ

其信認可知

レ、一人敢テ抗スル者ナシ、屢々鹿児島ニ游ヒ、西郷隆盛、桐野利秋等ト時事ヲ論談シ、大ニ彼ノ信認ヲ受ケ、情交甚タ密也、福岡人、某一日、桐野利秋ヲ過キ、福岡其人ナキヲ歎ス、桐野曰、舌間慎吾、越智彦四郎、等ノ在ル有リ、何ソ無ケント云ハン、薩人、皆舌間ヲ知ル者、福岡ノ武勇客ト称シ、其名ヲ呼ハスト云フ、明治九年、熊本、萩、秋月、ノ兵起ル、福岡士人等、亦之ニ應セント、屢々之ニ迫ル、舌間静ニ諭シテ曰、時未タ早シ、動ク可カラス、某、固ク前議ヲ執テ可カス、舌間潜然

精誠感人

涙ヲ垂レ、嘆シテ曰、嗚呼、方今同志者乏シ、一朝ニシテ、此好男子ヲ失フ可ケンヤ、時機ノ来ル、其レ近キニ在リ、諸君軽ク動テ、百年ノ大計ヲ誤ル勿レ、某等、其厚義ニ感シ、又前議ヲ言ハス、共ニ他日ヲ期シテ別ル、同十年二月、鹿児島ノ警報、達スルヤ、奮然之ニ應セント、三月十九日、越智彦四郎、武部小四郎、久光忍太郎、等ト平尾村ニ會シ、大隊長ヲ撰ム、後、武部ノ副大隊長ト為リ、専ラ壮士ヲ嘯集ス、同二十七日夜、武部突然、今夜兵ヲ挙ルヲ報ス、舌間急ニ兵ヲ召ス、到

惜哉

ラス、僅ニ數人ヲ率ヘ武部ニ會ス、時ニ越智彦四郎、攻城ノ功ナラス、大休山ニ退ク、則チ武部ノ命ヲ以テ、越智ニ大休山ニ會ス、同二十八日、官兵ト戰ヒ、互ニ勝敗アリ、然レ氏此山、守地ニアラサルヲ以テ、内野村ニ退ク、距福岡三里許同二十九日、官軍追撃スト聞キ、兵ヲ野芟村距福岡二里許ニ進メ、逆ヘ撃テ大ニ利アリ、直ニ福岡ヲ衝キ、台城ヲ蹂躙セント欲スレ氏、如何セン、兵士疲倦、復タ用ヲ為サス、乃チ曲淵村距福岡四里強ニ退ク、同三十日、官軍合圍、頗ル苦戰、加之銃器焔藥又全

紙上迸鮮血

ク尽キ、兵士益疲困ス、大ニ敗レテ、即夜肥前國三瀬驛（距福岡ニ六里弱）ニ退キ、四月一日、前軍ヲ督シテ、將ニ筑前國秋月城ニ據ラント欲シ、肥前國東駅警察署ヲ襲ヒ、筑後乙隈村ニ於テ、兵士ニ朝饌ヲ傳フ、時ニ官兵、四面来襲、兵皆腰未タ刀セス、足未タ鞋セサルニ、右聞獨衆ニ擢テ抗戰血鬪、漠々タル砲烟ヲ挑發シ、霏々タル彈雨ヲ衝突シ、遂ニ仆焉、實ニ年三十五ニシテ即チ明治ノ第十年、四月一日ナリ、墓ハ筑前、那珂郡、山田村ニ在リ、魂ヲ函嵩、十里松原ニ祭ル、

三ツ瀬山宿陣の時雪のふりくれハ
三つ瀬山峯ゑ松風とハゝ問へ
我真心も今朝のしら雪

○

今村百八郎　筑前秋月人、宮嵩車之丞ノ弟也、少壯ヨリ義氣ヲ負ヒ、頗ル武技ヲ嗜ミ、最モ拔刀ニ巧ミナリ、曾テ尊攘ノ議ヲ唱ヘ、本藩福岡ノ獄ニ繫カル、常ニ自ラ誓テ曰、予勤王ヲ以テ自カラ任ス、已ニ久シ矣、戊辰ノ役、天下豪傑ノ士、奮テ幕府　逆政ヲ顛覆シ、八百年来、西山ニ陷

蛟龍潛淵

落セシ、白日ヲ再ヒ中天ニ挽回シ、聖天子ノ恩光、將ニ四方ニ浹子カラントシ、政令大ニ整頓ス可キニ、豈圖ランヤ蒼生怨望上下離國歩頻ニ退却シ彼ノ忠直ナル、島津久光屢々其非ヲ切言スルノミナラス、天下有志ハ讜言モ馬耳東風ニ附シテ顧ミス、國体日ニ季微シ、遂ニ外夷ノ奴隷タラントス、國政豈ニ一變セサル可ケンヤ機アラハ風雲ニ乘シ、以テ雄圖ヲ試ミントス、然レ共僻郷ノ寒士、如何トモス可ラス、謹テ只時機ノ来ルヲ待ツ而已、明治八年秋

益田静方、白根新太郎等、東京ヨリ帰来、宮嵜車之丞、磯醇等ト會シ、大事ヲ議スルヨ耳スルト虫氏、今村、曽テ兄車之丞ノ意ニ、逆フ所アル欤、其會ニ列スルヨ不得、同九年三月牟田止戈雄、偶然今村ヲ訪フテ曰、頃日越後人大橋清賢ナル者、益田静方、宮嵜車之丞等ト會シ、又長州前原一誠ト謀リ、九州諸縣ヲ牽ケテ、大事ヲ企テントス、故ニ今マ白根新太郎ヲ、鹿児島ニ遣ハサントス、然ルニ只旅資ヲ欠ク、君其レ意アラハ、援ケン乎、今村快ク之ヲ諾ス、後又舎弟、宮嵜哲

憤懣可思

之ヲ来リ曰ク、弟亦長州ニ向ハントス、少シク旅資ヲ助ケラレン乎、今村又諾シ、後、哲之ヲ帰ルト雖モ、一言國事ニ渉ルノ報ヲ為サス、只萩城異状ナキヲ道フ而已、今村ロニ其不遜ヲ鳴ラサスト雖モ、心窃ニ其妄状ヲ憤ル、一日益田静方来リ、悲憤慷慨、國家ノ時弊ヲ談シテ曰、予長州ニ入リ、大事ノ決ヲ取ラントス、事敗ルレハ、前原ト共ニ死ス、國家ヲ以テ自カラ任スル者、豈之ヲ辞セン、事甚密ニメ且厳ナリ、謹テ他人ニ語ル勿レ、只君其レ之ヲ黙識セヨ、袂ヲ拂

不覚使人泣

テ去ル、今村大ニ其意ニ感シ、行ヲ送リ、閭ニ倚リ、益田ノ頭影、白雲青樹ノ外ニ没スルマテ、躊躇シテ戸ニ入ラス、謂ヘラク、静方ノ為ヲ人ヤ、恭順ニシテ果断、今日必ス死セン矣予豈ニ之カ傍観ニ堪ヘンヤ、後数日ヲ経、萩城ニ至レハ、静方、白根新太郎、大橋清賛共ニ在リ、乃チ奥平謙輔、横山俊彦、山田頴太郎ニ面シ、事ヲ謀ル、彼等曰、前原ノ心腹タル数人、遽カニ反覆、従来ノ進路ヲ異ニシ、忽チ政府ノ戒ムル所トナル、暫ク時機ヲ待ツ可シ、今村等大ニ然リトシ、独リ静

方ヲ駐メテ去ル、先是宮嵜等、熊本敬神黨ト深ク結ヒシヲ以テ、十月二十三日、該党ノ士人来リ曰ク、遠カラス、熊本台兵ヲ襲ハントス、君等断シテ相應ス可シト、乃チ其虚實ヲ審カニセント欲シ、宮嵜哲之丞等ヲ熊本ニ遣ハス、此ノ時ニ當リ、今村其確報ヲ得ハ、多年磨励シ来ル所ノ、義膽ヲ表シ、畢生ノ能力ヲ、逞フセント、心大ニ誓ヒ、尚ホ近隣ノ形情ヲ知ラント欲シ、益田静方ヲ佐賀ニ派シ、古川八郎ヲ柳川ニ遣ハス、十月二十五日拂暁、古川八郎馳セ歸リ、熊本勃

發ノ狀ヲ陳フ、於此、今村等、断然兵ヲ挙ケント決シ、再ヒ益田静方ヲ、佐賀ニ行カシメ、應援ノ兵ヲ促サシメ、各其向フ所ヲ定メシム、今村檄ヲ傳ヘテ、兵ヲ田中天滿社ニ招集シ、色ヲ正シ揚言シテ曰、方今逆臣　聖天子ノ耳目ヲ塗ル民ヲ水火ノ中ニ驅リ皇國ノ存亡今日ニ極レリ矣、天下有志ノ士、豈袖手傍観ニ忍ビンヤ、予等、熊本、山口ノ諸豪傑ト相謀リ、義兵ヲ起サントス、苟モ神州男児タル者直ニ兵ヲ持シテ来レ、異議アル者ハ去レ、衆皆奮テ之ニ従ヒ、忽チ

會フル者、三百餘陣營ヲ西福寺ニ設ケ、佐賀ノ報ヲ待ツ、此之時ニ當リ、宮嵜車之丞等、別ニ兵ヲ秋月学校ニ集ム、車之丞、馳セテ西福寺ニ至リ曰、学校ノ衆一旦断然拳兵ニ決スト雖モ、群議紛々、遂ニ中止ス、且區戸長等、諭スニ解散ヲ以テス、若シ從ハサレハ、直ニ鎮台ノ鋭ヲ加ヘント、汝等一旦、山中ニ退ク可シ、今村荅テ曰、兵器既ニ整頓シ、士氣益々振起ス、騎虎ノ勢、安ソ中止ス可ケン、且、兵ヲ出タスニ當リ、未タ一戰ヲ試ミスシテ、退クハ是レ兵家ハ取ラサル所、況ヤ

北條將斃

彼ハ大軍、我ハ孤軍、只進ム可クシテ、退ク可ラス、奮進衝突、縱横一激、敵ノ氣ヲ奪フニ如カス、衆大ニ之ヲ然リトシ、乃チ白旗ヲ製シ、之ニ報國ノ二大字ヲ書シ、鯨波湧クカ如ク、西福寺ヲ發シ、女男石ニ進ム、台兵未タ至ラス、只見ル巡査數十名、屯在スルヲ、直ニ擊テ之ヲ退ケ、穂波半太郎、巡査一名ヲ擒ニシ、妙源寺ニ退ク、今村穂波ヲ詰テ曰、汝チ從来ノ正義ヲ變シ、種々ノ狡計ヲ施シ、國家ノ罪人、神人共ニ憤ル所、汝ノ厚顔、惡ム可シ、我天ニ代テ、汝ヲ誅ス、汝チ快ク

之ヲ受ケヨ、一刀ノ下ニ斃ス焉衆皆巡査ヲ屠ラントス、今村之ヲ制シテ曰、半太郎ノ罪跡、天下ニ暴白タリ、故ニ之ヲ殺スモ、妨ケナシト雖氏、何ノ罪カ、巡査ニ在ル、今我天下ニ先テ、義ヲ挙ク、一、不辜ヲ殺ス、義兵ニ非サルナリ、速ニ解放ス可シ、衆皆悟リ、慇懃ニ放帰セシム、於此今村兵ヲ進メ、台兵ト勝負ヲ一戰ニ決セントト欲ト雖、宮嵜車之介、磯醇等、可カズシテ曰、豊津士族ハ、曾テ大事ヲ約スルヲ以テ、先ツ豊津ニ出テ、之ト協心戮力、兵氣ヲ皷舞シ、形勢ヲ皇張セ

ント欲ス、今村之ヲ可トシ、兵ヲ進メテ、油須原ニ陣シ、磯平八宮嵜伊六ヲ遣ハシ、豊津士族ノ應援ヲ、促サシムルト雖氏、逡巡事決セス、大ニ疑フ可キノ形跡アリ、今村声ヲ励シテ曰、我兵ハ方ニ死地ニ在リ、兵法ニ云ハスヤ、疾戰則存、不疾戰則亡ナリ也、今ノ謀ヲ為ス者直ニ兵ヲ豊津ニ進メ、士族ヲ脅従シ、勢ニ乗シ、台兵ヲ屠リ、一皷シテ馬関ヲ衝キ、長州前原ノ兵ト合セン、若シ豊津士族、言ヲ左右ニ托シ、我議ニ従ハサレハ、罪ヲ前約背違ニ問ヒ、一蹴シテ過キン而已、

醜氣衝鼻

乃チ豊津ニ入ル、時ニ士族三百余、錦原学校ニ
會ス、磯醇ヲシテ談議ヲ為サシム須臾アノテ
同意ヲ表スルノ誓書ヲ取ル、将ニ午餐ヲ兵士
ニ傳ヘントス、忽チ砲声一發、四面伏悪ノ台兵、
一時ニ起チ、彈丸雨注、砲烟四塞、士族等反覆台
兵ヲ助ケ、交ヘ撃ツ、秋月ノ兵事不意ニ出ルヲ
以テ、錯諤狼狽、今村總カニ、一隊ヲ率ヰ、一條ノ
血路ヲ開キ、英彦山ニ向テ走ル、江川村ニ至レ
ハ、日已ニ黄昏、台兵追撃ノ訛傳アリ、兵ヲ諸道
ニ伏セテ待ツ、然レ𪜈兵數頻カニ減シ、氣力皆

ナ失フ、又為ス可キノ勢カナシ、今村天ヲ仰キ
嘆シテ曰、事去リ矣、運極ル矣、汝チ等悉ニ離散ス可
シ、独リ去テ、大河内ニ至ラントス、白根新太郎
等、凡ソ兵六十騎ヲ率ヰ追ヒ至リ、叩頭シテ曰、予
等既ニ死ニ断シテ他ナシ、願クハ幸ニ死所ヲ
授ケヨ、今村其意ヲ壮トシ曰、然則進テ秋月屯
在ハ、台兵ヲ夜襲ス可シ、道ヲ倍シテ發ス、秋月
ニ達スル頃、其兵ヲ撿スレハ、僅カニ二十六七
騎ヲ餘ス、然レ共、皆必死ノ徒ナリ、直チニ秋月
学校ヲ襲ヘハ、豈料ランヤ、隻卒寸兵ノ之ヲ守

悲痛可想

モル者ナク、只、吏人ノ逡巡スルヲ見ルノミ、之ヲ斬殺シ、去テ女男石妙源寺ニ屯スル、台兵ヲ襲撃シ、警察出張所ニ火シ、突喊ノ声ト共ニ、秋月学校ニ退ク、時ニ見ル、壁間書札ノ斉々タルヲ、執テ之ヲ閲スレハ、豈料ランヤ、宮嵜車之丞、磯平八、磯醇、戸波半九郎、土岐平澄、宮嵜哲之助、戸原安浦等、栗河原ニ於テ、自尽セシ時ノ絶筆也、今村不覚泣潸然トシテ下ル、即時去テ三ツ山ニ至リ、衆ニ向テ鮮散ヲ命ス、然レ共相留テ、死生ヲ同フセント欲スル者、牟田止戈雄、平江

親雄、自根新太郎、戸倉歳男、堤三郎、中野五郎三郎、天野弥藏、石井寛治、田島慕、益田逸叟（静方實父）ノ十人也、今村自ラ腹ヲ屠ラントス、牟田止戈雄耳ニ附キ、語テ曰、長州佐賀ノ如キハ、不日果メ事ヲ発ス可シ、然レハ再挙ノ期豈ニ無レト云ハンヤ、今國家ノ為メ、義旗ヲ翻シ、一朝事敗レテ、空ク死ニ就クハ、大丈夫ノ所為ニ非ス、如カス形ヲ潜メ、時機ノ再来ヲ待ツ可シ、今村大ニ之ヲ然リトシ、則チ兵器ヲ捨テ、去ラシム、今村、益田逸叟ヲ伴ヒ去ル、今村形ヲ變シ、商買ニ

擬シ、逸叟ニ別レ、途ニシテ筆墨ヲ贖ヒ、長州三田尻ノ商、外屋武藏ト偽名シ、舟ヲ僦テ、萩ニ渡ラント欲スレ𪜈、警備嚴ニシテ時ヲ不得、轉シテ佐賀ノ形勢ヲ、探ラント欲シ、肥前ニ赴ク、途ニシテ、前原等ノ兵ヲ起スヲ聞キ、心窃ニ喜ベリ、佐賀ニ居ル了、二三日、前原ノ縛ニ就キシ、掲示アルヲ見テ、亦為ス可ラサルヲ悟リ、消息ヲ故山ニ通シ、而後處スル所アラントシ、筑前夜須郡、山隈村、上野某ヲ訪フ、某在ラス、其妻慇懃ニ家釀ヲ出ス、將ニ一醉ヲ試ミントスルノ際

警吏早ク既ニ之ヲ知リ、来テ縛ス、先是増田静方佐賀ニ捕ヘラレテ、福岡ノ獄ニ在リ、十二月三日、静方ト共ニ刑場ニ上ル、揚々謠ヲ歌ヒ、意氣昂然静カニ首ヲ授ク、時ニ年三十四年七ケ月、此場ニ臨ム者、今村平生慷慨ノ氣象、轉タ未路ヲ悲ム者多シト云、法官某、有句曰、盛矣今村百八郎、雄心不變斷頭場、以テ證ス可シ、

獄屋ニ柱ヨ書付ける

世の中を思ひきりまし〳〵霊の緒を

暫し獄やよ繋きける哉

辞世

天地は靈と屍も歸はあり
今ぞ別をつぐる世の人
塵を指て馬と為すとも世は中は
我真心を神ぞ知らく

明治血痕集上篇終

明治十二年九月十九日版權免許
同　十四年五月　出版

編輯兼出版人
福岡縣士族
奈良原至
筑前國福岡區福岡
極樂寺町三十六番地

同縣士族
林斧吟
同國同區簀子町
百三番地

專賣書肆

010190531410
43-13750